

# ラオス山岳地帯における教育の質に関する研究 —学校観察から見えてきた格差—

乾 美紀 原田雅也<sup>1</sup>  
人間環境部門 元兵庫県立大学<sup>1</sup>

## A Study on the Quality of Education in the Mountainous Region of Lao PDR

Miki INUI, Masaya HARADA

School of Human Science and Environment,  
University of Hyogo  
1-1-12 Shinzaike-honcho, Himeji, 670-0092 Japan

**Abstract:** This study examines the differences in class formation and learning contents and the reasons behind them in Lao People's Democratic Republic. It further investigates how these differences impact the quality of education, specifically academic achievements. Field interviews were conducted, and the results revealed that schools facing teacher shortages and limited budgets are forced to formulate multi-grade classes, and their learning contents are determined by the local needs and availability of teachers. The results also indicated that low-achievement schools are characterized by multiple-grade class formation, multi-ethnicities, and high poverty. Changing the situations of ethnicity and poverty witnessed in these schools is barely possible, because teachers in these schools are not equipped with appropriate teaching methodologies for multi-grade teaching. Therefore, it is necessary to accord them teacher training opportunities to improve the quality of education.

**Keywords:** quality of education, minorities, multi-grade class, Lao PDR

### 1. 研究の背景

#### 1.1 研究の目的

ラオスのような開発途上国では、慢性的に起こっている教育予算や教員不足のため、国内でも学級形態や教育内容に大きな差異が見られる。特に教育予算が限定されている地方の学校では教育の質に問題が生じている。たとえば筆者らが観察した山岳地帯の村では、教員不足のため一人の教員が異なる教科を異なる2つの学年（3年生と4年生）に同時に指導していた。例を挙げると、理科と社会の合科教育である「私たちの身の回り」という教科の授業では、3年生にはラオスの歴史的人物を指導する一方で、4年生には水の循環などをテーマとする理科を教えていた。このように異なる複数の学年が1人の

教員から同時に指導を受ける学級形態のことを「複式学級」と呼ぶ。この小学校（コックハン村小学校）では、教室の中には学年を隔てる仕切りはなく、1つの黒板を2分割して、2つの学年が使用していた。

また、授業の様子を観察したり、教室に掲示されている時間割を見ると、計算が主な内容である算数を3年生に指導する一方で、読んだり話したりすることが主な内容のラオス語を4年生に同時に指導していた。従って小学校の時間割は複雑である（表1参照）。筆者はこのような学級形態では、教員の負担が大きくなっているように感じた。なぜならば、複式学級を運営する教員にはただでさえ膨大な管理能力と適切なタイムコントロールが求められるためである。

表 1. コックハン村小学校の時間割 (3、4 年)

		1	2	3	4	休休み	5	6
月	3	国旗掲揚	算数		ラオス語		音楽	実習
	4		ラオス語		身の回り			
火	3	ラオス語		算数	身の回り		体育	実習
	4	算数		ラオス語				
水	3	算数	ラオス語		道徳		絵	実習
	4	身の回り		ラオス語				
木	3	ラオス語		算数	工作		掃除	実習
	4	算数		ラオス語				
金	3	ラオス語	身の回り	英語			調査	実習
	4	道徳						

(現地の学習内容をもとに翻訳)

筆者らは、学校を観察するうちに、このような学級形態や時間割のもとで質を保ちながら授業を行うことが可能なのか、またこのような指導方法で子ども達の学力には影響がないのか疑問を抱き、これらの点について調査を行うこととした。

本研究の目的は2つある。まず、1つ目はラオス・ルアンパバーン県をフィールドとし、学級形態と学習内容の差異を調査したうえでその差異が発生している原因を明らかにすることである。そして2つ目は、それらの違いが子ども達の学力にどのような影響を与えているのかを明らかにすることである。

## 1.2 ラオスの概略と教育制度

ラオスは東南アジアに位置する社会主義国家であり 49 の民族からなる多民族国家である。少数民族は主に山岳地帯で暮らし、それぞれの独自の言語や文化を築いている。内陸の小国であることもあり、産業の発展が遅れており、いまだ開発途上国として位置づけられている。

産業の割合としては、サービス業約42%、農業約17%、工業約29% (外務省 2019) である。一人当たりの GDP は、約 2,568 ドルであり、年々順調に経済発展が進んでいる。しかしながら、隣国のタイと比較すると、タイの一人当たりの GDP は約 7,274 ドルであるので、まだまだ経済力の弱さが見て取れる (The World Bank 2018)。また、国内で貧困格差が見られることも問題である。例えば、首都ビエンチャンの貧困率は 8.9% であるが、調査地であるルアンパバーン県では 22.9% にも上っている (Coulombe, Epprecht, Pimhidzai, Vilaysouk 2016)。

ラオスの教育制度は、就学前教育、初等教育、前期中等教育、後期中等教育、高等教育の5つに分けられる。義務教育は初等教育の5年間 (6～10 歳) と前期中等教育の4年間 (11～14 歳) を合わせた9年間である。公立

校であれば授業料・教科書は無料であるが、登録費は各家庭の負担であるため、経済的に貧しい家庭にとっては、子どもに教育を受けさせることが負担になる場合もある。

2017 年の就学率は就学前教育が 46.46%、初等教育が 91.47%、中等教育で 60.01% (UIS)、と近年の初等教育の拡大と共に飛躍的に拡大している。

## 2. ラオスの教育と少数民族

### 2.1 ラオスにおける教育問題

ラオスにおける近年の教育問題を精査してみると、通学のための費用が高く中途退学する、少数民族は教育に関心がなく、女子は家事に貢献している (World Bank 2016) など、通学や考え方に言及する報告も出ている。教育の質に関しては、地方行政の弱さを指摘できるだろう。ラオスでは政治構造の地方分権化によって、行政に関わるマネジメントが地方に委譲されたが、義務や責任を十分に果たせていない状況である (Xayavong & Pholhirul, 2018, UNESCO 2017)。特に慢性的な予算不足から、地方では十分な教師の配置、カリキュラムの編成、教材、教授法の開発、評価の管理などの教育の質に関する向上ができていない。他にも教員の質・能力の低さ、教科書・教材・教具の不足など、教育分野が抱える課題は依然として多く、特に少数民族が居住する山岳地帯では顕著な課題となっている (The United Nations in Lao PDR 2015, Xayavong & Pholhirul, 2018, UNESCO 2017, 新聞 2017)。

現在の大きな問題はボランティア教員の多さだろう。筆者らが教育省職員に行なったインタビュー (2019 年 8 月) によると、国内には約 10,000 人以上のボランティア教員がいる。彼らは地方政府の予算不足のため正規雇用できない教員に替わる有資格者である。数年後に正式採用の可能性があるとはいえ、無給で働く教員のモチベーションは低いいため、教育の質にも影響が表れることになる。地方や山岳地帯に行くほど教育予算が限られているため、少数民族は不利な立場に置かれている。

### 2.2 民族間における教育格差

ラオスの 49 の民族は、居住地の高低や言語系統によってタイ・カダイ系 (低地に住む多数派民族)、モン・クメール系 (山腹に住む少数民族)、モン・ヤオ及びシナ・チベット系 (高地に住む少数民族) に大きく分かれている (MOE 2005, Lao Statistics Bureau 2015)。その中でラオヤルーなどの民族集団を中心とした多数派民族であるタイ・カダイ系がラオスの政治や経済の中心を担っている。言語は公用語であるラオス語を母語とし、メコン

川沿いの低地に居住しているため教育へのアクセスが良好である。

表2は1995年—2015年の民族別の識字率の推移を示しているが、多数派民族の識字率に比べて少数民族の識字率が極めて低いことが分かる。たとえば多数派民族のラオの識字率(2015)は93.3%であるが、少数民族のアカは36.2%である。1995年のアカの識字率は3.8%であるので識字率はかなり改善されているが、現在でも民族間で大きな差があることを確認できる。

表2. 民族系統の識字率 (単位%)

	タイ・カダイ系		モン・クメール系		モン・ヤオ及びシナ・チベット系	
	ラオ	ルー	カム	カタン	モン	アカ
1995	75.2	73.9	40.9	30.3	26.5	3.8
2005	85.1	76.1	59.1	37.3	45.0	11.4
2015	93.3	87.4	78.6	51.0	70.2	36.2

(出典: National Statistics Center 1995, State Committee for Census of Population and Housing 2005, Lao Statistics Bureau 2016)

この要因としては、先述したように、多数派民族は公用語であるラオス語を母語としているのに対して、少数民族は独自の言語や文化を築いているためだと考えられる。また、多数派民族が低地(都市部)に居住しているのに対して少数民族は山岳地帯に居住していることも、要因の1つとして挙げられる。Rigg (2005) が、1年を通して通行可能な道路インフラが整備されているのはモン・クメール系の村のうち53%、モン・ヤオ系は35%、シナ・チベット系語族の場合は50%のみに限られると報告していることから、少数民族が社会から孤立していることを読み取ることができる。

山岳地帯の学校ではアクセスが制限されてしまい、自宅から学校に到着するまで何時間もの時間を費やす児童があり、学校に到着したとしても、低地に比べて学習環境が整っていないために十分な教育を受けることができない。そのため、子ども達は勉強に関する興味関心を失い、学校に行かなくなって、文字の読み書きができなくなってしまうのである。

### 3. 途上国における複式学級と学習内容

#### 3.1 先進国と途上国における複式学級の比較

鈴木 (2008) は、複式学級は先進国・途上国に関係な

く存在しており、この最も顕著な違いは、複式学級について認知しているか否かであると述べている。この認知していない状況こそが、途上国における複式学級の問題の本質である。

フィンランドなどの先進国では、むしろ複式学級の利点を積極的に認めて、複式学級を編成している。複式学級の利点とは、学習者中心の教授法を実践できることや教員と児童の親密な人間関係を構築しやすいことである(大津 2007)。また、オーストラリアや欧米の農村地域でも、フィンランド同様、複式学級特有の利点が認識されており、教員1名の学校や複式学級は質の高い教育を提供する効果的な方法とみなされている(鈴木 2015)。日本でもネガティブな先入観は根強いものの、僻地手当や助成といった側面支援や、研究会や複式用の授業計画など、積極的な対応がとられている(鈴木 2008)。

このように先進国の複式学級は教育普及と公正という視点において高い貢献度をもっているにもかかわらず、多くの途上国においてはネガティブに受け止められ、正式に国の学校教育制度としてみなされず、的確な方針も政策もないことが多い(鈴木 2008)。また鈴木 (2015) によると、複式学級教員は特別な支援を受けず、必要な教員訓練も受けていないことがほとんどである。したがって、教員は単式制度と自らの現実である複式学級の狭間でどうすればいいのかわからないまま一人で立ち向かわなければならないのである。従って、教員は独自の判断でそれぞれ指導を行う。その結果複式学級の運営は多様化し、その実態は学校ごと、教室ごとに異なる。

鈴木 (2008) は日本とネパールの複式学級を例にとり、複式学級の運営方法を5つに分類している(図1参照)。これらは複式学級に対する認識、責任、配慮によって分類されており、下から上にかけて上昇していき、高い方法ほど質の良い運営を行うことができている。たとえばネパールでは、複式学級を実施している意識がない(第1パターン)、複式学級の担当責任がない(第2パターン)という段階にあり、認識や責任が乏しい傾向にあるといえる。ネパールに限らず、途上国では責任は理解しているが管理できていない状況(第3パターン)が一般的だが、複式学級の授業に責任を持ち、同時指導できている国もある(第4パターン)。これらより上方に位置する日本は、標準よりもさらに複式学級に対して深い配慮と責任感が伴う傾向にある。



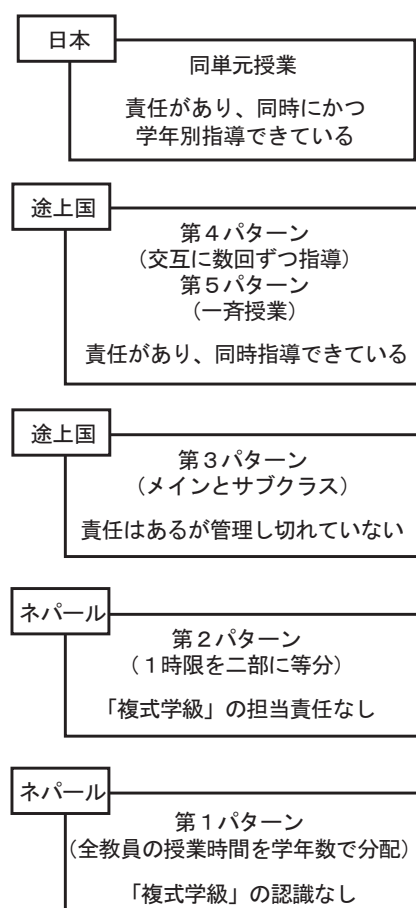


図 1. 複式学級のはしご  
(出典：鈴木 2008 をもとに筆者作成)

しかし、大津 (2007) は途上国であるエチオピアを例にとり、通常の公立学校と同じ条件に加えて、複式学級の教員に適切な研修が実施されれば、途上国においても効果的な教育を実現することが可能であると述べている。実際に、研修を実施した場合、単式学級よりも複式学級の方が成績が高いという結果が残っており、その理由としては、先述した学習者中心の指導法や親密な人間関係が反映していると考えられる。

以上のように、途上国においては複式学級のポジティブな特色を十分に理解し、その良さを生かすような指導をし、教員計画を立て、実践することが求められる (大津 2007)。

### 3.2 ラオスにおける複式学級と学習内容

ラオスでは遠隔地を中心に公立小学校のクラスのうち 27.8%が複式学級である (外務省 2017)。複式学級の運営方法にはいまだ一貫した方法がなく、それぞれの地域で異なり、多様化している。効率よく複式学級を運営することができないクラスでは、教育の質や子ども達の学

力が低下するのはもちろんのこと、子ども達はだんだんと勉強のやる気を失い、学校に来なくなるケースもある。

本研究の調査地であるルアンパバーン県パクウー郡に関する情報はないため、同郡と同様に山岳地帯に属するヴィエンカム郡で活動するシャンティ国際ボランティア協会 (2014) (以下、SVA と記す) の情報を提示すると、ヴィエンカム郡は約 81%もの学校が複式学級を運営している。同県の都市部に位置するルアンパバーン郡の複式学級の割合が約 13%であることを加味するとその多さが分かる。しかしながらほとんどの教員が複式学級での指導方法と技術を習得していない。また教員 1 人あたりの児童数は、全国平均が 26 人に対して 35 人と多くなっている (SVA2014)。これらのことが、結果として教育の質低下や学力の低下を招いている。

調査地パクウー郡の郡事務所職員によると、同郡でも今まで複式学級に特化した研修が行われたことはない。そのため SVA は行政や教員養成校とともに、複式授業に関する教材開発や教員研修などを実施する「複式学級運営改善事業」を展開している。



図 2. 山岳地帯における複式学級の授業風景  
(3 年生と 4 年生を同時指導)

ラオスにおいて学習内容に関する先行研究はほとんどない。カリキュラムの策定は国立教育科学研究所によって行われる。表 3 に示している初等教育カリキュラムは、2005 年から開始された世界銀行が支援する Education Development Project II (EDP II) の下で改訂され、新しいカリキュラムの特徴は、児童中心の学習方法が取り入れられたこと、3 年次から英語の授業が導入されたこと、1 授業の時間数が 50 分から 45 分に短縮されたことなどが挙げられる (津曲 2012)。



表3. 小学校の週・年間あたりの授業数

教科	2年		3年		4年	
	週	年	週	年	週	年
ラオス語	10	330	8	264	6	198
算数	4	132	5	165	6	198
道徳	1	33	1	33	1	33
身の回り	2	66	2	66	3	99
英語	0	0	2	66	2	66
課外活動	2	66	2	66	2	66
計	19	627	20	660	20	660

1学年：33週間 時限：5-6時限/日1授業：45分

出典：津曲（2012）より主要科目と3学年のみ抜粋

以上のように、本研究に類似した研究は見られたが、本研究の目的でもある学級形態や学習内容の差異やその差異がもたらす学力効果を示した研究は未だ見られない。本研究ではラオスの教育現場で情報を入手しながら、東南アジア特有の社会問題である民族格差にも関連させて研究目的を追究していく。

### 3. 調査概要

#### 3.1 調査方法と概要

##### 3.1.1 調査方法

本研究の調査方法は、主にインタビュー調査と学校における観察である。具体的にはラオスで2回に分けて調査を行った。まず1回目の現地調査(2019年2月)では、ルアンパバーン県における学級形態と学習内容の差異を明らかにするための調査に向けて、コックハン村ともう一つの村（ホエイカン村）の教員、都市部に位置するルアンパバーン小学校の教員を対象に行った。また2回目の現地調査では、同じく上記2村の教員と別の村（ホエイペン村の教員）、そして新たに訪れた他の2村の教員、ルアンパバーン県教育スポーツ局副局長やパクウー郡教育スポーツ事務所職員を対象に行なった<sup>1</sup>。

この現地調査の目的は、1回目の現地調査で得られた結果についてさらに深く情報を得ることである。

##### 3.1.2 調査地の概要

ラオスは18の県に分けられる。調査対象地であるルアンパバーン県は図3の丸で囲んだ8にあたり、首都ビエンチャン（図3の10）から北へ約400キロメートル離れた山岳地帯に位置している。また、ルアンパバーン県は11の郡に分けられる。図4の6-01に当たるのが県の中心地であるルアンパバーン郡であり、本研究の調

査対象地であるパクウー郡は6-04、先述したヴィエンカム郡は6-10に位置している。

パクウー郡の初等教育残存率（小学校の最終学年まで在籍した比率）は79.6%（2014）であり、8割の小学生が中途退学をせずに最終学年の5年生まで到達していることが分かる。しかし県都であるルアンパバーン郡では、87.2%と高い結果を残している（Lao EDUInfo 2014）都市部と山岳部の学習環境の格差を垣間見ることができる。

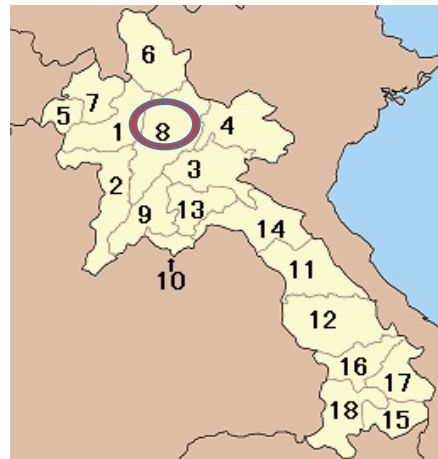


図3. ラオス行政区分

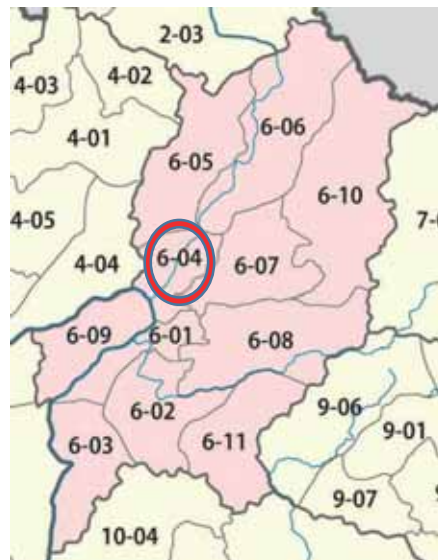


図4. 調査地パクウー郡の位置（6-04）

#### 3.2 3村の基本情報

本節では筆者らがこれまで調査してきた3村（コックハン村、ホエイカン村、ホエイペン村）の基本情報を説明する。

まずコックハン村には、多数派民族であるラオと少数民族であるカムとモンの3民族が共存している。民族比はラオが38%、カムが31.4%、モンが30.6%であり、大きなばらつきはない。産業は主に自給自足による農業であり、自分たちの村でカエルやエビの養殖も行なうなどして収入を得ている。また村の小学校には、1年生から4年生までのクラスしかなく児童数は50名程度である。5年生がない理由は、5年生の児童が10人しかおらず、教員を派遣できないからである。そのため5年生の子ども達は、約5km離れたホエイペン村の学校まで通っている。

次にホエイカン村は学校全体でカム族が100%であり、自給自足による農業のみで生計を立てている。特に主な農産物もなく、人々が現金収入を得ることが難しいため3村の中で最も貧困な村である。児童数は合計37人と少ないにもかかわらず、村で5年生まで運営している。しかし1年生のみ単式学級で、2、3年生、4、5年生は複式学級である。1年生のみ単式学級を運営している理由は、初等教育の初段階である1年生は、学校に慣れるために単式学級で教えるべきだと、教育スポーツ事務所により通達されているためである。

最後にホエイペン村は、多数派民族に属するルーが75.2%、残り24.8%がカムであり、大半が多数派民族である。同じく農業を主産業としているが、裕福な住民がトラックを所持しており、生産した農作物を街の市場まで販売しに行ったり、運送会社を営んだりと様々な業種の産業に取り組んでいる。そのため、3村の中で最も裕福な村である。児童数も合計87人と多く、村人が協力して学校のベンチの建設や校舎の修繕を行うなど学校環境が整っている。

### 3.3 インタビュー概要

#### 3.3.1 ラオスでの現地調査 (2019年2月)

現地でどのような調査を行ったかについて端的に記していく。1回目の現地調査の概要は表4に整理した。本研究では主に3つの村および小学校を訪問した。質問内容は主に学級形態や学習内容に関するものである。

表4. 調査対象地の調査概要①

	コックハン村	ホエイカン村	ルアンパバーン小学校
対象	校長	校長、教員	校長、教員
位置	山岳地帯	山岳地帯	都市部
主な質問	異教科を教える理由とそのメリット・デメリット	学習内容と時間割	学習内容と時間割

なお都市部のルアンパバーン小学校は、県の中心地(都市部)に位置する公立の小学校である。児童はほとんどが多数派民族のラオで少数民族の児童はいない。この学校は、山岳地帯の小学校との比較を行うために調査を行った。

#### 3.3.2 ラオスでの現地調査 (2019年8月)

2回目の現地調査の概要は表5に整理した。2回目の調査は、1回目に訪問したコックハン村、ホエイカン村に加えてホエイペン村を訪問し、さらにより多くの情報を収集するために2村を追加した。これらは上記3村から車で約30分離れた場所に位置するボムホム村とティン村である。

主な質問内容は学級形態(複式学級)に関する事、時間割や学習内容に関する事、学力に関する事の3つであるが、ボムホム村とティン村のみ初めての訪問であったため、村と学校の人数や民族比、産業などの基本情報についても調査を行なった。それぞれの村が特色を持っているが、紙幅の都合上、本稿では共通して質問した内容のみを記述する。また、2回目の調査では郡教育事務所に加えて、県教育副局長にもインタビュー調査を行った。

表5. 調査対象地の調査概要②

	コックハン村	ホエイカン村	ホエイペン村	ボムホム村	ティン村
対象	校長 教員	校長 教員	校長 教員	校長	校長
質問内容	① 複式学級の教え方について(研修について)				
	② 複式学級・単式学級の指導方法のメリットとデメリット				
	③ 村の子どもの学力および特徴				

#### 4. インタビュー調査結果

##### 4.1 学級形態と学習内容に関する調査結果

本研究の目的は2つあった。1つ目はルアンパバーン県（パクウー郡）における学級形態と学習内容の差異を明らかにして、その差異が発生している原因を明らかにすることであった。そして、2つ目はそれらの違いが子ども達の学力にどのような影響を与えているのかを明らかにすることであった。学力の情報について、村で入手できない場合は、教育事務所より入手した。第1節では、2019年2月に行った1回目の調査（コックハン小学校、ホエイカン小学校、ルアンパバーン小学校）の結果について整理していく。

##### 4.1.1 コックハン村小学校

先述したように山岳部に位置するコックハン村では異なる教科を同時に指導するという特異な教授法で授業をおこなっていた。

コックハン村では、3、4年生を担当する校長先生にインタビュー調査を行った。一番の疑問であった「なぜ異なる学年に異教科を指導していたのか」という問いについては、異なる教科を指導する方が児童の集中を完全にさえぎることができるためと話した。例えば算数とラオス語を同時に指導することを例にとると、先述した通り計算が主な内容である算数と話したり書いたり話したりすることが主な内容であるラオス語では、授業内容が全く異なっており、他学年の授業を完全に遮断できるため、自分たちの授業のみに集中できるという。教授法は、算数を学習している学年に問題を出した一方で、ラオス語を学習している学年に直接指導をする方法である。そして次にラオス語を学習している学年に問題を出した後、算数の授業に移り、先ほど出した問題の答え合せと指導を行う。このように、問題提示と直接指導を1時限のうちに数回行う。このような運営方法にすることで、教員が同じ教室で異なる学年に指導をしていても、子ども達はそれぞれの授業だけに集中できるという見解である。

また、校長は20年以上複式学級を指導しているため、異なる教科を指導することに慣れており、校長にとっても全く別の教科を教える方が学習内容が混ざらないので複式学級を運営しやすいと述べていた。本来は教育事務所が指示する時間割および学習内容に従って授業を行わなければならないのだが、コックハン村の学習内容は20年のキャリアを活かして教員が内密に独自で考えたものであった。独自の方法で教える理由は、定期的に学校の学習内容や授業内容を監査する Pedagogical Adviser（日本の指導主事にあたる。以下、PA と記す）がコックハ

ン村に訪問しに来ないため、自分たちで試行錯誤をしていたからであった<sup>2</sup>。

次に異教科を同時指導するデメリットについて質問をしたところ、教員が重労働になってしまうことである。ただでさえ複式学級を運営することは膨大な労力が求められるが、コックハン村の教員は自分自身で学習内容の構成から授業運営までを一人で行っているのである。

最後に「教える内容が半分になってしまうのではないか」という質問に関しては、確かに時間は限られているが、教える内容を半分にするのではなく、重要な部分のみを重点的に指導しているので問題がないと述べていた。授業時間に制限があるため、通常のカリキュラム通りに進めると学習しなければいけないことを学習できないことが懸念されるが、急いでカリキュラムを飛ばすことなく、進級テストもほとんどの子ども達が合格できていると答えた。

##### 4.1.2. ホエイカン村小学校

コックハン村から10kmほど離れたホエイカン村の学習内容は表6に示す通りである。コックハン村と同じ複式学級ではあるが、ホエイカン村では同時に同じ教科を指導している点が異なっていた。例えば、コックハン村は同時に算数とラオス語を同時指導しているが、ホエイカン村では異なる学年に同じ科目（例：算数）を同時に指導していた。

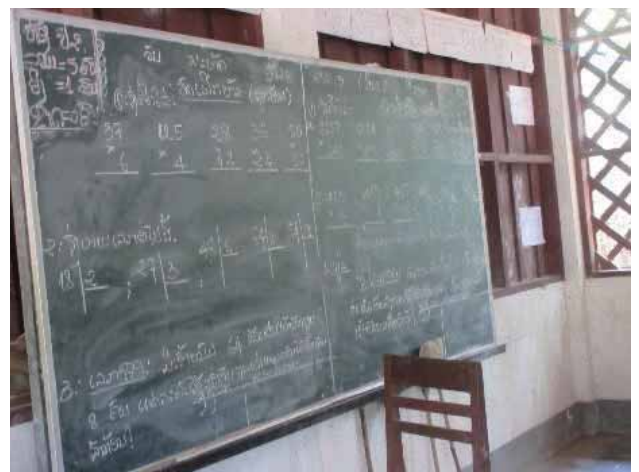


図5. ホエイカン村小学校の黒板  
（黒板を分割し、2、3年生に算数を教える）

以前はコックハン村と同様に異教科を指導することが許されていたのでそうしていたが、現在は教育事務所が作成した学習内容に従わなければならないため、同教科同時指導をしていると話した。教授法はコックハン村と



同様(こ)それぞれの学年への直接指導と問題提示を繰り返す方法である。

ホエイカン村小学校の時間割の特徴は、ラオス語の授業が週に 11 時間もあることである。コックハン村では 8 時間であったので、同じ学年でも学習内容がかなり違うことが分かる。この理由については校長も教員も把握していなかったため、県教育局へのインタビュー時に尋ねることとした。

表 6. ホエイカン村小の時間割（2、3 年生）

		1	2	3	4	昼休み	5	6
月	2 3	国旗掲揚	ラオス語				絵	実習
火	2 3	ラオス語					体育	実習
水	2 3	道徳	身の回り	ラオス語			絵	実習
木	2 3	算数		ラオス語			掃除	実習
金	2 3	身の回り		算数	英語		音楽	

(現地(の)の時間割をもとに(を)翻訳)

ホエイカン村では、複式学級を指導する教員に「同教科を同時指導する場合のメリット・デメリット」についてインタビューを行った。まずメリットは、同じ教科を指導するため授業内容を統一することが可能であり、教員も授業を行いやすいということが挙げられた。ホエイカン村の教員は、授業内容の統一により学年ごとで内容はそれぞれ異なっているものの、頭の整理をしやすいと述べていた。次にデメリットは、異教科と異なり同教科は多少内容が重複しているため、子ども達が他学年の授業が気になってしまい自分たちのすべきことに集中できないと述べた。つまり一方の学年で授業をしている時にもう一方が静かにできないということが挙げられた。これは異教科を教えるか、同教科を教えるかにかかわらず複式学級で授業を行う際に共通の問題であると考える。

なおホエイカン村では PA が頻繁に訪問するため、教育事務所が決めた時間割を利用していた。

4.1.3 ルアンパバーン小学校

ルアンパバーン小学校はルアンパバーン郡で最も観光客の多い都市部に位置している。都市部に位置しているため児童数も 300 人以上と多く、上記 2 村が複式学級を運営していたのに対して、1 人の教員が 1 つの学年を指導する「単式学級」を運営していた。また、この小学校

で特徴的なのは、3 年生から英語コースとフランス語コースに分かれて勉強をするほど外国語が充実している点である。英語だけでなくフランス語も勉強しているのは、ルアンパバーン小学校がフランス語の重点校だからである。フランス語センターの支援により始まったフランス語学習はまずは首都ビエンチャンで始まり、1998 年からルアンパバーン県でもスタートされた。ルアンパバーン県の中では 3 つの小学校と 2 つの中学校のみでフランス語を学習することができ、そのうちの一つがルアンパバーン小学校である。また、教員はフランスに留学経験のあるラオス人が指導を請け負っているため授業の質も高い。筆者らはこの学校で子どもたちにフランス語で話しかけられたことがあったり、彼らがフランス語を難なく話したりしていたことから、子ども達の語学力の高さも見受けられた。

表 7、8 はルアンパバーン小学校の 3 年生と 4 年生の学習内容である。ここに示しているものはフランス語コースの学習内容であるため、フランス語の時間数が多い。その中でも特徴的なのは、4 年生から始まる「フランス語による算数」(表中の算数(仏))という授業である。普段ラオス語で学んでいる算数をフランス語で学ぶことで、より語学の向上に努めているのである。このように、山岳部に比べて都市部では語学の授業が重要視されていることが分かる。また、山岳部の小学校が月曜日から金曜日までの 5 日で、それぞれ毎日 6 時限の授業を行う合計 30 時間なのに対して、都市部ではそれぞれ毎日 7 時限の授業を行う合計 35 時間もの勉強をしている。

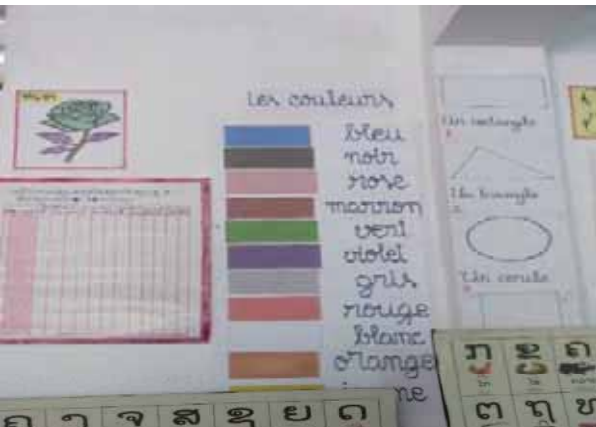


図 6. 教室内に見られるフランス語表記

表7. ルアンパバーン小学校の時間割（3年生）

	学年	1	2	3	4	昼休み	5	6	7
月		国旗掲揚	フランス語		道徳		ラオス語		絵
火		算数		ラオス語			ラオス語	体育	
水	3	フランス語		算数			身の回り		絵
木		ラオス語		フランス語			工作		掃除
金		フランス語		算数	ラオス語		英語		HR

表8. ルアンパバーン小学校の時間割（4年生）

	学年	1	2	3	4		5	6	7
月		フランス語		ラオス語			身の回り		体育
火		算数（仏）	ラオス語	算数			英語	道徳	工作
水	4	算数（仏）		ラオス語			算数		絵
木		算数		フランス語			身の回り		掃除
金		フランス語		ラオス語			絵	旗上げ	

（現地の時間割をもとに筆者翻訳）

以上のように、それぞれの小学校で時間割が大きく異なっていることが分かった。学級形態についても、複式学級を運営する学校もあれば単式学級を運営する学校も存在する。また複式学級だけでも、異教科を同時指導する場合と同教科を同時指導する場合に分かれる。このように1回目の現地調査では、ルアンパバーン県における学級形態と学習内容の差異を明らかにすることができた。



図7. ルアンパバーン小学校教室の様子

## 4.2 学級形態と学習内容に差異が生じる原因

### 4.2.1 学級形態に関する調査結果

1回目の現地調査よりルアンパバーン県における学級形態と学習内容の差異を明らかにすることができた。インタビュー結果より、学級形態に差異が生じている原因は2つあることが分かった。1つ目は、児童数の違いである。校長、教員、郡教育事務所から得た情報によると、単式学級を運営する基準は1クラス（学年）30人以上であり、それ未満の場合は複式学級となる。ラオスは原則ひとつの村に1校を建てるのが奨励されてきたので人口の少ない村は児童の数も少ない。

2つ目は、教員数の違いである。仮に児童が1クラス20名程度でも郡教育事務所に単式学級の実施（つまり教員補充）を申請することはできるが、予算不足のため教員を雇うことはかなり困難であるし、教員も地方の村に赴任したがない。学校設備や生活環境の整った都市部で働きたい教員が多い反面、山岳部で働きたい教員は少ないのが現実である。そのため、山岳部では単式学級を運営する人数に値する児童がいても、教員不足により複式学級を運営せざるをえないこともある。教育スポーツ事務所によるとできれば複式学級から単式学級に移行をしたいと考えているが、運営するためだけに教員を増やそうとすると今度は給料を払えない等の金銭的問題が発生してしまうのである。

### 4.2.2 学習内容に関する調査結果

県教育局副局長に学習内容についてインタビューしたところ（2019年8月）、学習内容は地方のニーズを考慮して作成されているため学校ごとで差異が生じるケースがあることが分かった。各学校の時間割の作成を担うのはパクウ郡教育事務所であり、同事務所はそれぞれの村の事情を考慮しながら学習内容を作成している。たとえばホエイカン村でラオス語の授業が多い理由は、全ての子どもが少数民族（カム）で、ラオス語を話す機会が少ないため、ラオス語の授業を増やしていると答えた<sup>3</sup>。都市部のルアンパバーン小学校の授業数が多いのは、教員が多いために複数の授業を設定することが可能だからである。このように学校の事情に応じて異なっている。

原則、学校はその時間割に従わなければならない。しかし1回目の現地調査の結果に表れたように、PAが訪問しないケースもある。そのため、PAが頻繁に訪問しないコックハン村のような村では独自の時間割を作成しており、PAが定期的に訪問するホエイカン村では変更したいと思いついても、教育事務所が作成した時間割に従っていたのである。ただしPAが来る場合は指導方法

についてもアドバイスをもらうことができるという。

一方、PA が訪問しない村では複式学級の運営に関する情報や指導方法についての情報が少ないことから、先行研究にも表れたように、それぞれの学校で教授法が多様化してしまうのである。このように、学級形態と学習内容がそれぞれの学校や PA の来訪の有無によって大きく異なっていることが分かった。

#### 4.3 学力に関する調査結果

##### 4.3.1 情報を追加した村の基本情報

次に本稿の第 2 の目的であった学級形態と子どもの学力について追究した結果を示す。その際、調査を行ったパクウー郡の村の 3 村だけでは比較ができないため、郡内の他の村の様子を見ることが必要となった。そこで 2019 年 8 月に新たに訪問したパクウー郡のポムホム村とティン村の情報を追加した。なおルアンパバーン小学校は、パクウー郡に属さないためこの調査に含めていない。

まずポムホム村は、モンが多数を占めているもののラオ、モン、カムの 3 民族が共存している。民族比はモンが約 66%、ラオが約 24%、カムが約 10% である。一見、他の村と様子は変わらなかったが、トラックを数台所持していたり、テレビのアンテナが立っていたり裕福な家庭が多く見受けられた。この村の主な産業は、とうもろこしやなすのような野菜を中心とした農業であり、採れた野菜はルアンパバーン市内まで車で売りに出ている。またこの村の大きな特徴は、人口が 1,000 人を超える大きな村であるということである。子どもの数が多いために小学校では単式学級を運営している。

次にティン村は、多数派民族に属するラオが 100% で成り立つ村である。主な産業は、ポムホム村と同様に野菜を中心とした農業や運送業である。またこの村には、山岳地帯では珍しくルアンパバーン郡の市内まで 2 時間ほどかけて働きに行っている公務員や会社員もいる。多数派民族のラオは仏教徒であり、仏教への信仰が深いのが他の村との相違点である。学校の横の敷地には寺があり、2014 年に寺の僧侶が資金を寄付し、学校の床をタイル貼りとしたため、学校内がきれいに保たれている。従って、本調査で訪問した 5 村の中では最も学習環境が整っているように見える村であった。しかし、児童数は 37 人と少なく 1、2 年生と 3、4 年生が複式学級を運営している。

##### 4.3.2 学力比較

では、これまで紹介してきたパクウー郡の学校（合計

5 校）の学級形態と学力にはどのような差異が見られるだろうか。学力については、全ての学校で共通の基準が必要なため、郡教育事務所の勧めで、郡内の小学校の小学校 5 年生の進学試験（中学校に進学するための試験）において A（80%以上の成績）を取った児童の比率を利用することにした。ただ、5 校あるなかでコックハン村の 5 年生はホエイペン村に通学するため、5 年生の進学試験はホエイペン村の情報のみが利用可能であると判明した。すなわち 4 校しか利用できないことが分かったため、教育事務所に依頼して郡内にある別の 2 つの村（サンハイ村やソヌサヌ村）の進学試験結果も追加することとした。それにより、全部で 6 校の試験結果を得ることができた（表 9）。

表 9. 進級試験合格者比率

学力	進学試験 A 取得者比	村名	学級 形態	民族	備考
高	100	ポムホム	単式	3 民族	留年させないように、教員が熱心に指導
	100	ティン	複式	ラオ族	村（寺）が裕福で教育熱心
	95	サンハイ	単式	ラオ族	人口が多く、教育熱心
低	93	ソヌサム	単式	3 民族	人口が多く、教育熱心
	92.3	ホエイペン /コックハン	複式	3 民族	3 民族の言語が違いため、学級運営が難しい
	83.3	ホエイカン	複式	カム族	全員がカム語で言語の疎通が困難

表 9 に示した通り、進級率の高い学校と低い学校ではそれぞれで特徴を持っており、多様な要因が絡み合って学力に影響を与えているという傾向が分かった。現状を詳しく見るため、ポムホム村、ティン村、サンハイ村を進級率の高い上位 3 校に分類し、ソヌサム村、ホエイペン村（コックハン村含む）、ホエイカン村を進級率の低い下位 3 校に分類する。

まず進級率が 100% であるポムホム村は、3 民族が共存しているものの、裕福な家庭が多く、人数が多いために単式学級を運営しており、教員や子どもが教育熱心であることが特徴として挙げられる。また、もう一つの進



級率 100%の村であるティン村は複式学級を運営しているものの、裕福な多数派民族であるラオのみが生活しており、ポムホム村同様に教育熱心である。次に、郡教育事務所職員によると、進級率 95%のサンハイ村と 93%のソヌサム村では民族構成が異なり、サンハイ村では多数派民族のラオが、ソヌサム村では 3 民族が共存している。また 2 村ともに人数が多く単式学級を運営しており、村全体で教育熱心である。最後に、ホエイペン村（コックハン村含む）とホエイカン村は少数民族が多数を占めている、もしくは少数民族のみが暮らしている。そのため、学校以外の場所では少数民族独自の言語を使用しており、学校で教員がラオス語でコミュニケーションを図るのが難しいと感じていた。2 つの村とも複式学級を運営しているが、ホエイカン村の特徴は、貧困のため親が教育よりも家の手伝いを優先してほしいと考えていることである。これは郡教育事務所や教員から聞き取った情報である。

以上の結果から、進級率の高い上位 3 校の特徴は 3 つ挙げられる。1 つ目に、単式学級の傾向があることである。2 つ目に、多数派民族であるラオの割合が高く裕福であるということである。3 つ目に、教員や子どもが教育熱心であるということである。ポムホム村では民族が多いことを意識し、特に少数民族の子どもたちを気遣って留年させないように丁寧に教えているということだった。進級率の低い下位 3 校の学校は、進級率の高い学校と真逆の特徴を持っている。すなわち、複式学級をもつ学校が多いこと、少数民族の割合が高いことである。ホエイカン村の場合、親が教育よりも家庭の手伝いを優先していることが影響していると考えられる。

本研究の 2 つ目の目的であった、「学級形態と学習内容の差異が子どもの学力にどのような影響を与えているのか」という疑問に関しては、調査対象から複式学級よりも単式学級の方が学力が高いという結果が得られた。しかし、2 回目の現地調査の結果から、学力に影響を与える要因として学級形態だけでなく民族比や経済、子どもやその親の教育に対する意欲なども関係しているということが分かった。例えば、進級率の高い学校に分類されるティン村には、多数派民族であるラオのみが居住しており、会社員や公務員といった農業に比べて高い給料を得ることのできる経済力の豊かな方も生活している。そのため、親をはじめとして、子どもも教育に対して熱心になるのである。これらのことから、学級形態と学習内容の差異は学力に影響を与えていることが分かった。

#### 4.4 調査のまとめと解決の教員研修の有効性

インタビュー結果に表れたように、学力への決定要因は学級形態にかかわらず、多様にあるということが理解できた。たとえば民族性、村の経済状況、教育への熱心さなどであった。これらは全て早急に解決できない課題だといえる。しかしながら、この中で学級形態に注目すると、教え方の問題つまり「教授法の改善」が解決可能な課題であると考ええる。

インタビューの結果、調査を行ったパクウー郡では、教員はこれまで複式授業の教授方法に特化した研修を受けていなかった。しかしながら、前述したように SVA が近隣郡で、複式学級を担当する教員の質向上を目的とした取り組みを行っている。これは「JICA 草の根技術協力事業」の一環として実施され、第 1 フェーズでは、複式授業に関する教材開発や教員研修などを実施し、複式学級に慣れた教員が自身の経験をもとに他の教員に行った。第 2 フェーズでは、研修内容に子ども中心の教授法を取り入れることとした。複式学級は教員が直接指導をしない時間ができてしまうため、学習時間を無駄にしないことが重要である。これらの有効な方法を含んだ研修については日本の大学から複式学級指導を専門とする教員を招聘し、複式学級における有効な教え方を研修しているという<sup>4</sup>。このように、複式学級における研修を NGO などを通じて行うことは、教育の質の向上につながると思える。

#### 5. 考察

以上、述べてきたように、現地におけるインタビュー調査から、本研究の目的であった、ルアンパバーン県における学級形態と学習内容の差異を明らかにし、その差異が発生している原因を明らかにすることができた。

都市部では、学習環境の充実と学校へのアクセスの良さから児童や教員が集まりやすく、主に単式学級が運営されている。そのため、外国語を指導することができる教員が配属されており、質の高い教育を受けることができる。しかしながら、山岳部では、教室不足や教員不足、教材不足などを理由に学習環境が整っていないうえ、複式学級を運営している学校が多いことが明らかになった。時間割や学習内容の違いは、村のニーズや教員の数などを考慮して決定されていることも分かった。

また本研究では、学級形態と学習内容の差異が子ども達の学力に与える影響を明らかにすることができた。単式学級と複式学級を比較すると、やはり単式学級の方が学力が高い傾向にある。その理由は、先行研究でも述べたように、発展途上国においては複式学級がネガティブに受け止められ、正式に国の学校教育制度としてみなさ

れず、的確な方針も政策もないことが多いからである。ラオスも同様であり、複式学級の研修は実施されているものの、複式学級を担当する教員は口を揃えて「単式学級を運営したい」と述べていた。このことから、学級形態が学力に影響を与えていることが分かった。

しかしながら実際に 6 つの学校の進学試験の結果から分析すると、学力の高さには学級形態のほかにも親の意識、経済状況、民族構成など実に多様な要因が絡み合っていた。特に、49 の民族からなる多民族国家のラオスにおいては、民族構成も大きな要因のひとつであることが分かった。しかし先述したように、学級形態、経済状況、民族構成は早急に解決することが難しい。そのため、複式学級の学力向上に向けては、大津 (2007) が述べていたように、複式学級を担当する教員自身が、複式学級のポジティブな特色を十分に理解し、その良さを生かすような指導をし、教員計画を立て、実践することが求められるのである。つまり、複式学級を担当する教員に効果的な教授法を指導することが学力向上につながると考える。これらのことが、図 1 で示した「複式学級のはしご」にある、第 4、5 パターンに近づく契機となるだろう。そのために、SVA が現在行っているような複式学級運営事業などの取り組みが欠かせないのである。当該事業は継続中のためまだ評価は出ていないが、このような取り組みを通して、ラオスの複式学級を担当する教員の意識がポジティブになり、それに伴って、子どもの学習意欲と学力向上につながることを期待したい。

<sup>1</sup> 県教育局は県全体の中等教育および技術・職業教育について実務的な責任を持っている。正式名称は県教育スポーツ局である。一方、郡教育事務所は、郡全体の就学前教育、初等教育、ノンフォーマルを中心とし、各学校の教育計画の準備も行っている。名称は郡教育スポーツ事務所である。

<sup>2</sup> この理由について教育局副局長に尋ねたところ、県教育局や郡教育事務所の予算が削減され、PA が郡内の学校へ視察に行くための出張費 (バイクのガソリン代、宿泊費) が出ない場合に起こっているという。特に予算が限られている近年は、訪問する村を絞っていると話した。

<sup>3</sup> コックハン村の場合、ラオス語を母語とする多数派民族と少数民族が混在しているため、少数民族の子どもがラオス語に触れる機会が多い。

<sup>4</sup> SVA の報告書、ホームページおよび担当者に実施したインタビュー (2019 年 9 月) による。

## 参考文献

- 大津和子「エチオピアへき地における教育開発-複式学級の意識と課題-」『へき地研究』62 号 北海道教育大学へき地教育研究施設 2007. pp.41-49.
- 鈴木隆子「日本とネパールの小学校における複式学級の現状比較」『南山大学国際教育センター紀要』9 号、南山大学国際教育センター 2008. pp.50-70.
- 鈴木隆子「解説：複式学級—途上国農村における教育普及の救世主?」エチレン・ブルンスウィーク、ジャン・バレスアン【著】鈴木隆子訳 解説『途上国における複式学級』東信堂 (2015) pp.9-19.
- 津曲真樹『ラオス教育セクター概説』国際協力機構 (2012) p. 26.
- 新関ヴァッド 郁代「ポスト 2015 段階におけるラオス少数民族の教育問題に関する考察」『国際教育』23 巻 日本国際教育学会 2017. pp.32-48.
- Coulombe, H. , Epprecht, M., Pimhidzai, O., and Vilaysouk, S., *Where are the poor? Lao PDR 2015 census-based poverty map : province and district level results*, 2016, World Bank Group, pp.91-99.
- Lao Statistics Bureau, *The 4<sup>th</sup> Population and Housing Census 2015, 2016*, Vientiane. Lao Statistics Bureau, pp. 120-123.
- National Statistics Center, *Results from the Population Census 1995*, National Statistics Center.
- Rigg, J., *Living with Transition in Laos: Market Integration in Southeast Asia*, 2005, Routledge, p.28.
- State Committee for Census of Population and Housing, *Results from the Population and Housing Census 2005*. State Committee for Census of Population and Housing, 2005.
- The United Nations in Lao PDR, *Country Analysis Report: Lao PDR*. 2015, pp.16-36.
- UNESCO, *Situation analysis of out-of-school children in nine southeast Asian countries*, 2015.
- UNESCO, *ASEAN Declaration on Strengthening Education For Out-of-School Children and Youth*, 2018.
- World Bank, *Reducing Early Dropout and Low*

---

*Learning Achievement in Lao PDR.* The World Bank, 2016, pp.11-12.

Xayavong, T. & Pholphiru, P., “Child labor and school dropout in least –developed countries: empirical evidence from Lao PDR, *International Journal of Education Economics and Development*, Vol. 9, No.1, 2018, pp.1-23.

#### URL

外務省 (2017)

[https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world\\_school/01asia/infoC12100.html](https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world_school/01asia/infoC12100.html) (2020 年 8 月 10 日アクセス)

外務省 (2019)

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/laos/data.html#sectio> (2020 年 8 月 10 日アクセス)

梶山葉子(2016) 「CHILD RESEARCH NET」

<https://www.blog.crn.or.jp/lab/01/105.html> (2020 年 1 月 10 日アクセス)

Lao Statistics Bureau (2018)

[http://www.unsiap.or.jp/e-learning/el\\_material/Agr/i/1804\\_Cost\\_KOR/CR\\_Lao.pdf](http://www.unsiap.or.jp/e-learning/el_material/Agr/i/1804_Cost_KOR/CR_Lao.pdf) (2020 年 8 月 10 日アクセス)

The World Bank (2018)

<https://data.worldbank.org> (2020 年 9 月 1 日アクセス)

Lao EDUInfo (2014)

<http://www.dataforall.org/profiles/laoeduinfo/> (2020 年 8 月 10 日アクセス)

SVA (2014) 『ラオス事務所 2014-2016 事業計画書』

[https://sva.or.jp/activity/oversea/laos/pdf/laos\\_2014-2016\\_plan.pdf](https://sva.or.jp/activity/oversea/laos/pdf/laos_2014-2016_plan.pdf) (2020 年 1 月 10 日アクセス)

UIS (UNESCO Institute for Statistics)

<http://uis.unesco.org/>(2020 年 8 月 20 日アクセス)  
(令和 2 年 11 月 10 日受付)